



TITLE:

翻訳論から見た英国 17 世紀の翻訳者たち 古典を訳した人間とその環境( Abstract\_要旨 )

AUTHOR(S):

大久保, 友博

---

CITATION:

大久保, 友博. 翻訳論から見た英国 17 世紀の翻訳者たち 古典を訳した人間とその環境. 京都大学, 2015, 博士(人間・環境学)

ISSUE DATE:

2015-09-24

URL:

<https://doi.org/10.14989/doctor.k19332>

RIGHT:

学位規則第9条第2項により要約公開; 許諾条件により要旨は2015-10-01に公開

( 続紙 1 )

京都大学	博士（ 人間・環境学 ）	氏名	大久保 友博
論文題目	翻訳論から見た英国 17 世紀の翻訳者たち —— 古典を訳した人間とその環境		
(論文内容の要旨)			
<p>本学位申請論文は、英国の 17 世紀においてなされた西洋古典および聖書の英訳を主要な研究対象としている。これまでパラテキストとして論ずる対象とされることの少なかった翻訳論を考察の中心に据え、その読解を通じて、翻訳者自身の翻訳思想と翻訳の実践による翻訳思想の変化、そして翻訳者が生きた時代の社会や文化がどのように翻訳者に対して影響を及ぼしたかを解明することを目的としている。このような目的意識のもと、英国 17 世紀の翻訳者たちの翻訳論と翻訳作品を考察している。</p> <p>本論文は序章、第 1 章から第 6 章（本論）、結論の 3 部分からなっており、付録として翻訳論の申請者による日本語訳が付いている。</p> <p>序章では、翻訳研究を行うにあたり、基本的な視座と方法が先行研究に触れながら説明される。</p> <p>第 1 章と第 2 章は共通のテーマとして 17 世紀の翻訳史を考える上での出発点とされる「逐字訳」の問題を取り上げ、翻訳環境へとつながる英国の文化および社会の背景を、幾人かの翻訳者に焦点を当てて明らかにしている。第 1 章「マイルズ・スミスら聖書訳者たちと翻訳長官フィリーモン・ホランド——万人のための訳」では、比較的低い階級出身であったマイルズ・スミスやフィリーモン・ホランドらの学者翻訳者が、社会の「益」として翻訳を世に出す際、当時の学校教育の発展からようやく読み書きが可能になった人びとを意識した英訳を目指して、総じて平易な逐字訳を選ぶ一方で、それぞれが期待する読書のあり方の違いが、翻訳行為において文字の置換と敷衍という 2 種類の方法論の差として現れたことを指摘している。そして第 2 章「ふたりの才人、ジョージ・チャップマンとベン・ジョンソン——古典（語）への恐怖と愛情」では、劇作とともに古典作品の英訳を行ったジョージ・チャップマンとベン・ジョンソンのふたりを取り上げ、両者が学校で受けた古典教育を検証した上で、チャップマンが学問コンプレックスからかえって旺盛な翻訳を発表し続けたこと、一方成績もよく古典に親しんだジョンソンが古典教養を作品として昇華し、翻訳についてもむしろ個人的な社交に用いていったことを明らかにしている。</p> <p>第 3 章と第 4 章は、17 世紀半ばの大きく変動する英国のなかで、自身の翻訳の捉え方とともに揺れ動く翻訳者の作品を考察している。第 3 章「ジョージ・サンズの旅と空想——慰安としての訳詩」では、海外植民を推し進める英国の民として、世界を転々としながらも翻</p>			

訳を続け、たびたび改訳した旅人翻訳者ジョージ・サンズの半生を扱い、彼がその翻訳行為を自らの陥った窮状における慰安としつつ、その訳文にそのときどきの自身の状況を書き込んでいったことを明らかにする。さらに第4章「ジョン・デナムの立志——作品への予感」では、内戦の前後およびそのただ中で翻訳を抛り所にし、翻訳行為を通じて自己と向かい合った紳士ジョン・デナムの半生を詳述し、出世を夢見た時期の翻訳と、その試みが失敗して閉塞していた時期の翻訳を比較しつつ、それぞれに付された翻訳論の比喩が内戦前と内戦後の宮廷文芸の環境に強く影響されたものであることを明らかにする。

そして第5章と第6章では、第3章、第4章で考察した17世紀英国における翻訳行為の積み重ねを元に、翻訳者たちが翻訳のあり方をどのように発展させたかを考察している。第5章「ロスコモン伯『訳詩論』と翻訳サークル——協訳から競訳へ」は、翻訳サークルという協同訳出の現場が、翻訳アンソロジーという翻訳者が翻訳を競う場へと、どのように変化発達していったかをテーマとして、内戦期にフランスに亡命していたロスコモン伯ウェントワース・ディロンを中心に、彼が亡命中に出会ったフランスのカーンでのアカデミーの活動や、王政復古直後にダブリンで関わった文芸サークルでの翻訳劇上演までの流れなど、彼の周辺環境が彼の翻訳活動に与えた影響を検証する。その上で、さらにロスコモン伯自身が主宰した翻訳アカデミーとその趣意書たる翻訳論の分析を通じて彼の翻訳活動の発展を明らかにし、17世紀英国における、このような翻訳活動の意義を指摘している。最後の第6章「ジョン・ドライデンと翻訳論の修辞——中庸と甦り」では、翻訳論そのものの生成過程に注目して、桂冠詩人ジョン・ドライデンが晩年に取り組み始めた古典の翻訳に付した序文に焦点を当てて考察している。そして彼の翻訳観が当時の修辞学の影響下に書かれた翻訳論に影響を受けており、その意味で伝統的なものであったことを明らかにし、さらに英訳という実践を経ることにより翻訳について意見を変えるにつれてドライデンの翻訳論は具体的になりつつも、一種の自己表現になっていった経緯を指摘している。

結論においては、以上の考察を踏まえて、17世紀英国の翻訳者たちが翻訳を通して自身の（そして環境の）変化を受け止めたことを明らかにし、その結果として彼らの翻訳論が現れたと論じている。そして過去・現在を含めた、大きな歴史・文化・社会という環境と、翻訳しつつ変転する人間というふたつの要素が、総合されて現れているのが翻訳論であると結論づけている。

なお、本論文には、付録として、論文中で取り扱われた翻訳論11篇（あるものは一部の）の日本語訳が付されている。申請者の手になるもので、いずれも本邦初訳である。

(論文審査の結果の要旨)

本学位申請論文は、17世紀の英国でなされた、聖書や西洋古典文学の翻訳作品の特質を、これまでにはない新しい視点から解明しようとした意欲的な研究である。従来の翻訳研究においては、ともすれば原典とその翻訳を比較検討するという方法が採られてきたが、本研究は翻訳作品としてのテキストの他に、テキストの外に存在するパラテキストに着目し、翻訳作品自体の考察とともに、パラテキストの分析を通して、17世紀英国においてなされた翻訳作品の特質を解明している。17世紀英国の翻訳作品の研究においては、これまでこのような視点からの翻訳研究は殆ど無く、その点で本論文は有意義な成果を示した労作であるといえることができる。以下、翻訳研究としての本論文の意義を述べる。

第一の意義は、翻訳研究にパラテキストという視点を導入したことである。パラテキストは翻訳作品の外にあるがその作品を支える諸物を指す。例を挙げれば献辞やエピグラフ、序文や手紙などがこれにあたる。従来の翻訳研究ではこのような、翻訳作品の外にあるものはあまり注目されなかったが、申請者は翻訳作品のみならずパラテキストにも注目しこれに積極的な意味を見出し、それらを分析し論述に効果的に用いている。この点で高く評価することができる。

第二の意義は、申請者が古典語に精通していることである。本論文の第2章はチャップマンによるホメーロスの『イーリアス』訳を論じており、また第3章はオウィディウスの『変身物語』を扱っている。また第2章から第6章はウェルギリウスやホラーティウス、またプリニウスなどの古典作品を扱っている。申請者はまず基礎的な作業として原典と英訳を精緻に比較し考察した上で、自らの論を展開している。卓抜な古典語の語学力なくしてはできない研究であるといえる。17世紀英国の古典翻訳という問題は、古典学者も英文学者もあまり研究することのない研究領域であり、等閑視されてきた感がある。申請者はこの領域に乗り出している。従来の英訳研究がとかく英語表現に重点を置いていたことを鑑みれば、その点で本論文の重要な意義が認められる。

第三の意義は、翻訳テキストの背後にある伝記的な事実にも極めて慎重な考察がなされていることである。ジョージ・サンズを論じた第3章では、彼がはじめは晩年のチャップマンと同じようにプロパガンダに関わりながらも、またジョンソンらと同じ伝統のなかで訳文を書きながらも、旅先にてその枠から抜け出すような翻訳を模索したことや、結果として当時の自己の状況が織り込まれたことが明らかにされる。ドライデンは未来や死後を見つめるに至った翻訳のあり方を、当初通説や印象によって非難していたが、ドライデンの最後の訳書では、同じように翻訳の永続性を考えるに至ったことから、サンズの訳が模範視されるようになったことが指摘される。このよう

な伝記的な事実の掘り起こしは第3章においてもっとも効果的に行われている。ロスコモン伯ウェントワース・ディロンの翻訳活動を論じた第5章は申請者の熱意をよく示す章となっている。ロスコモンが主催する翻訳アカデミーは、ジョンソンの時代から続く紳士階級の座興としての翻訳のあり方と、フランスで起こったアカデミーの形態が、双方に触れたロスコモン伯によって融合され、発展したものであった。その形はドライデンを通じて、翻訳アンソロジーという形態に転じ、18世紀翻訳文化への道を作るに至った。このような知られざる事実を申請者は丁寧に発掘し明らかにしつつ、翻訳作品の特質を解明したことは特筆に値する。膨大な資料を渉猟し、それらを丁寧に読みこみ、自らの論述に活かしている。

第四の意義について述べれば、申請者が論じた翻訳者たちはベン・ジョンソンやチャップマン、またジョージ・サンズやジョン・デナム、またロスコモン伯やジョン・ドライデンであったが、これらの文人はその重要性に比してこれまで注目されることが少なかった作家である。このような作家・文人に光をあてたことは、賞賛に値する。17世紀英国の翻訳研究へのさらなる貢献が期待される。

以上のように、本論文は17世紀になされた聖書や古典文学の英訳の問題を、原典とその英訳の比較研究という視点を超えて、テキストの外にあるパラテキストも含めて考察した意欲的な研究である。新しい伝記的な事実も多数掘り起しており、その点でこれまでにない方法と問題意識をもった研究といえる。17世紀英国の翻訳研究に新たな光を当てるものとなっている。

よって、本論文は博士（人間・環境学）の学位論文として価値あるものと認める。また、平成27年7月3日、論文内容とそれに関連した事項について試問を行った結果、合格と認めた。

なお、本論文は、京都大学学位規程第14条第2項に該当するものと判断し、公表に際しては、当該論文の全文に代えてその内容を要約したものとすることを認める。

要旨公表可能日：平成27年10月1日以降